はじめに

常任理事・情報広報部長　藤井　美穂

こんにちは。６月から情報広報部長となりました藤井です。早速、若手医師コーナーを新設することにしました。若手医師の声を吸い上げる“Spirits”、そして彼らの活動報告コーナーの“アクションズ”の２部構成です。

次世代を担う若手医師の医師会への参画が必須と考え、平成28年８月に医療関連事業部では、北海道医師会勤務医部会の下部組織として若手医師専門委員会を設立しました。勤務医の抱える課題を臨床現場で働く若手医師とともに解決していくプロセスで、若い世代から学ぶ多くの点がありました。また医学生や研修医とともに医師のキャリア形成や働き方を話し合うセミナーにおいても、内容だけでなくSNSやITを駆使した伝達手法など、発想の転換につながる学びがありました。

全国の中でも特に広大な北海道の地域医療は、今後の医療提供体制のパラダイムシフトを求められることでしょう。この現状を若手医師とともに考え行動を起こしていきたいと思っています。

“Spirits”では、若い先生が日頃考えていることを、テーマを決めずに書いていただきます。タモリの「笑っていいとも！」の「来てくれるかな？」よろしく「書いてくれるかな？」でリレーしていただきます。“アクションズ”では、道医主催、共催のセミナーの他、さまざまな活動を報告していただきますので、年代を超えて時間を共有してみてください。

Actions

アクションズ

若手医師活動報告

若手医師専門委員会初代委員長として

北海道医師会勤務医部会若手医師専門委員会
藤根　美穂
岩見沢市医師会・岩見沢市立総合病院小児科

次世代を担う若手医師の意見を北海道医師会勤務医部会の活動に反映することを目的に「北海道医師会勤務医部会若手医師専門委員会」が設立された。第一期の委員は、若手世代を原則50歳未満とし、地域、診療科、卒年、性別などが考慮され、25歳から44歳の男女各４名、平均年齢36.3歳でスタートした。

2017年10月に北海道医師会の担当で開催された全国医師会勤務医部会連絡協議会の翌日に、全国初の世代を超えた交流を通じて、勤務医の働き方を考える「勤務医交流会」を開催した。当日は、私が委員長として総合司会を務め、学生や若手医師とベテラン医師合わせて数人ずつのグループを構成し、「勤務医の働き方」の各論として、「長時間労働の法対策」「多様な働き方と診療支援システム」「医療現場の世代間ギャップと管理職の意識」「キャリア設計とワークライフバランス」「医師として働くことの理想と現実」の５つのテーマに沿ってワークショップを行った。各委員はテーブルごとのファシリテーターとして活躍し、タイトな時間配分の中、上手にまとめ発表していた。日医今村聡副会長から「本日の試みは大成功だと感じた。出席者の年齢差が上下で55歳もあり、活発な議論にならないのではないかと危惧していたが、杞憂だった。短時間での議論と集約を行えることに、改めて一人ひとりの医師としての能力の高さを感じた。本日出された意見の国への提言、広報が日本医師会の役目である。」と総括をいただいた。

この２年間若手医師専門委員会として活動してきて何より良かったことは、普段は話をする機会がない諸先輩たちと診療科を超え、医師としての仕事の枠も超えて同じ時間を過ごし話し合うことができたことだと思う。確かに専門医として一通りの仕事をこなせるようになるまでの時期はとても苦しいものだが、「若い」時期を超えてその先どのように過ごしていくかについても先達の存在は大事である。心理学者E・H・エリクソンの発達段階説によれば40代以上65歳ぐらいまでの壮年期の達成目標は次世代育成であるが、医師としての現場での次世代育成にとどまらず、職能集団としての次世代育成にも私たちは多かれ少なかれかかわっていく必要があると思うし、そうした点でも医師会での活動は重要なものと感じている。例えば、いきなり親になることがとても難しいことであるのと同じように、後に続くものを守り育てることも学び実践する中で少しずつ身についてくるものである。医師会の中に若い仲間がこれからも増えてくれることを期待しつつ、緊張感を保ちつつ、仲間たちのためにできることを精いっぱい務めていきたいと考えている。

若手医師専門委員会
委員長を拝命して

北海道医師会勤務医部会若手医師専門委員会
委員長　上田　寛人
旭川市医師会・医療法人社団弘和会森産科婦人科病院

上田寛人です。卒後14年目になります。妻と娘が２人います。家庭でも職場でもほぼ女性ばかりの環境で生活しています。趣味は胎児エコー、特技は帝王切開といった感じの仕事中心人間でしたが、最近家庭に関わるゆとりが少しだけできました。上の子（小６）が産婦人科医になりたいと言ってくれてちょっとほろっときました。

令和元年10月６日の第２回若手医師専門委員会にて２代目委員長を拝命いたしました。

本委員会は、次世代を担う若手医師の意見を北海道医師会勤務医部会の活動に反映することを目的に、さまざまな能力・価値観を持った多様な若手医師による専門委員会として、平成28年８月に設置されました。私も設立時のメンバーとして初代委員長の藤根美穂先生のもと、北海道医師会が担当しました平成29年度全国医師会勤務医部会連絡協議会での活動をメインに参加させていただきました。

しかし、正直に申し上げますと、委員に召集されるまで私は医師会の活動には全く興味を持ったことがなく、勤務先の方針で強制加入だった初期研修医時代を除いて北海道医師会、郡市医師会の会員ではありませんでした。それがどういう訳か、今や絶滅危惧種となりつつある若手男性産科医という属性に目を付けられ、藤井美穂常任理事の意を受けた旭川医科大学産婦人科学講座千石一雄教授の鶴の一声で約10年ぶりに北海道医師会に入会することになったのでした。

実はここに若手医師の医師会加入率が伸び悩む根本的な原因があります。まず医師会が日頃どのような活動をしていて、実際のところ自分にどんなメリットがあるのか、高い会費分の利点はあるのかといった点が、全くといっていいほど伝わっていないこと。そして、道内で勤務する若手医師の大半が大学医局に所属し、関連病院を１～２年単位でローテーションしているにも関わらず、郡市医師会の境界を跨ぐたびに、医師会の退会と入会の手続きを繰り返さなければならない点です。例えば学会の多くは病院を移動しても、事務局への連絡だけで簡単に手続きができるようになっており、よほど決意しなければ退会することなく継続していくことがほとんどではないかと思われます。

現在、若手医師専門委員会では、勤務医にかかわる地域医療活動、生涯研修および福祉対策等に関し、若手医師の意見を北海道医師会勤務医部会の活動に反映させるための規約を作成中です。理事会でご承認いただけました暁には、若手医師の意見を代弁するだけではなく、世代間ギャップを乗り越えて、勤務医全体の労働環境が改善していけるように、そして次世代の医師をリクルートし続けることで、北海道医師会が健全に発展しているように尽力してまいります。会員の皆様からの温かいご支援、ご協力の程心よりお願い申し上げます。

医学生・若手医師の
キャリア形成支援について

北海道医師会勤務医部会若手医師専門委員会
佐藤　峰嘉
北海道大学医師会・北海道大学病院 内科Ⅰ

卒後８年目です。一般内科・呼吸器内科診療の経験後、最近大学院生として基礎研究を始めました。得意な家事はごみの分別と料理です。料理は息抜きにもなっています。

若手世代が今後どのようなキャリアを歩むのか主体的に考えることは重要なことと考えています。卒前卒後の医学教育制度が変遷したこともあり、今日の若手世代には主体的な選択の機会が多くあります。

これまで北海道医師会では、男女共同参画やワークライフバランスについて早期からの理解を深めることを目的に、「医学生・研修医と語る会」を開催し、医学生や研修医を招き、話題提供や意見交換を行ってきました。医師会が若手世代を支援する重要な目的がある一方で、学生や研修医にとっては会議形式がやや堅苦しく、自由な意見交換が難しいような印象がありました。

2016年７月からは、我々ジュニアドクターズネットワーク（JDN）の若手医師や、医学生が企画を行い、「医学生・若手医師キャリアデザインセミナー」として形式を一新しました。幅広い世代が自由に意見交換のできる雰囲気であることや若手世代がより関心のある内容にすることを心掛けました。第１回のテーマは当時関心が高まっていた新専門医制度でしたが、その後は様々なキャリアのモデルケースとなるような先生にご講演をいただいています。会の後半では全体が小グループに分かれ、ベテラン世代の先生方、年齢のより近い子育て世代の先生、研修医、医学生が一緒になります。若手世代からはキャリア形成にお

ける課題や懸念、希望の声が聞かれ、上の世代の先生方からは自らの経験に即したお話や、若い世代に対して激励の声をいただいています。会は全体を通して非常に温かい雰囲気で行われ、若い世代と医師会の距離を近づけるような効果もあるように思われます。以前よりも多くの若手世代に参加してもらっていますが、特に卒後まもない研修医はやはり日常臨床業務に多忙で参加が少ないのが現状です。医師会のよさを活かしつつ、若い世代のニーズに即した取り組みをしていくことが重要と考えています。

若手医師の先駆的な取り組み

北海道医師会勤務医部会若手医師専門委員会
阿部　計大
日本医師会ジュニアドクターズネットワーク
東京大学大学院医学系研究科公衆衛生学

札幌市出身。手稲渓仁会病院、手稲家庭医療クリニックで研修を受け、家庭医療専門医を取得。その後、東京大学大学院公衆衛生学教室で博士課程を修了後、同教室で医療・介護政策の研究を続けている。３人家族で、夫婦ともども北海道愛を強く持つ。

医師会の内外において、若手医師による自発的でチャレンジングな取り組みが散見される。本稿では、それらの中で典型的と考えられる若手の活動について、目的別に二つに分けて紹介する。

まず、何らかのテーマについて学習することを目的とした活動である。例えば、学会や地域毎に若手医師向けの勉強会を提供している母体が数多くある。また、医師会関連では、日本医師会ジュニアドクターズネットワーク（JDN）が、世界医師会JDNを通して他国の同世代の医師と国際保健を学ぶ機会を若手に提供したり、医療政策や国際保健、学術理論（社会的共通資本や健康の社会的決定要因など）、実践的内容（患者に伝わりやすい医療情報の伝え方など）について自主的にワークショップを行っている。また、京都府医師会や静岡県医師会では、指導医の監修の下で若手医師も運営に参加し、災害や救急症例を用いた実践的なシミュレーション学習を行う「屋根瓦塾」が開催されている。そして、北海道医師会では、医学生や若手医師が企画を担い、キャリアデザインセミナーと題して様々なキャリアを歩んでいる先輩医師の話を聴き、考える機会を提供している。医師会で扱われるテーマは、学会や地域毎の勉強会のそれとは差別化が図られているように思われる。

二つ目は、現行の医療に新たな視点で価値を付加しようとする試みである。例えば、コンピュータやインターネット、ポータブルデバイス、機械学習の発達によってもたらされている産業革命の流れの中で、それらに馴染みが深い若手が、医療への応用を目指す動きである。ベンチャー企業や非営利組織を立ち上げて、国民への正しい医療情報の提供方法や遠隔診療の提供体制の模索、臨床医同士のオンラインネットワーク構築による互助活動の促進、３Dモデリング技術を使ったインフォームドコンセント資料の開発、機械学習を用いた診断補助技術の開発など、挑戦は多岐に亘る。また、世界医師会JDNは医師の安寧に関する声明案を提出し、日本医師会JDNの有志は医学生らと共に医師の働き方改革に関する調査と提言を行うなど、将来の医療の在り方を考え、現行の医療に対して若手の声を届ける試みも為されている。そして、北海道医師会や富山県医師会では、全国に先んじて若手医師の委員会を設立し、若手のアイデアを活動方針に活かす試みを始めている。今後、若手医師によって医師会事業に新たな視点がもたらされる可能性がある。

北海道医師会は、役員の先生方の温かいご支援の下で、若手医師を積極的に巻き込んで、全国的に先駆的な取り組みを続けている。このままフロンティア精神を大切に、世代に関係なく情熱をもって医師会活動に取り組み、医療提供体制の改革が進む時代を乗り越えていきたい。